

ゲルマン語起源のワロン語動詞 における借用過程

鞍 岡 和 人

1. 序論：借用と *bilinguisme*

ワロン語諸方言にはゲルマン語から借用した動詞が比較的豊富に観察される。例えば、“*Dictionnaire liégeois*”⁽¹⁾の語源索引には、ゲルマン語起源の語として900に近い数の語が挙げられているが、その中約170が動詞である。こうした事実から、ワロニー（Wallonie）地域と、隣接するゲルマン語圏の間に緊密な接触があり、しかもその接触を促す役割を果たす仲介者として、言語境界線の両側に多数の二言語話者が存在していたとする説が提出されていたが、今日、この説に対しては否定的な意見が大勢を占めている⁽²⁾。Legrosによれば、唯一こうした二言語話者の存在が考えられる場合は、フランク族による現在のワロニー地域の植民地化の時代であり、しかも二言語話者はガロ＝ロマン語話者の側ではなく、フランク族の側にいたと考えられている⁽³⁾。

二言語話者を介在させない形で、即ち借用する側の話者が個人的な体験を通じて、動詞を借用する場合がワロン語においては顕著であったということを認めるとするならば、ある動詞のカテゴリーに関しては、それらが現われる文中においてその動詞が持つ主観的意味（或は価値）を通してのみ借用が行われた

(1) HAUST(1979), pp. 724-728.

(2) DEROY(1980), p. 213.

(3) LEGROS(1942), p. 228.

と考えざるを得なくなる。何故なら借用側の話者にとって、借用動詞の意味を解釈する唯一の方法は、それらの動詞の外的な要素、即ちそれらの動詞が用いられる場と形態以外にないからである。

2. 借用と認知過程

例えば、A言語の話者がA言語を全く解さない聞き手に対して、目前に展開されている光景に関して注意を喚起する目的で、ある単純な語（例えば「見ろ！」、或は“Regarde!”）を発話しても、それだけで聞き手は「見る」或は“regarder”の概念を一挙に理解することはできないだろう。もっとも、聞き手は発話が自分に向けられており、さらに、発話の内容が聞き手に何等かの行為を促す命令的観念を含むものであることは理解し得るに違いない。従って、記号内容（signifié）それ自体は、こうした主観的要素を通してしか理解されない。聞き手はこの主観的要素と、さらに話し手が表現し伝達しようとする観念を想起させ得る動作や身振りによって初めて記号内容を理解できるのである。そこに用いられた記号表現（signifiant）は全く機能を果たさない。何故なら、聞き手は、話し手の言語に関する知識を全く持っていないからである。しかし、こうした認知過程⁽⁴⁾に加えて、主観的要素に連合する聴覚的印象を無視することはできない。同じ聴覚的印象が同様な状況の下で繰り返し現われるならば、それは意識的で持続的になり得る。発話行為がそれに続く。聞き手は、新しい言語記号に対して、聞き手の言語の音韻体系或は形態論の体系に準じて対応し、新しい語或は表現を自らの言語項目の中に加えていく。同じ現象が複数の話者において起こる場合、外来語は便宜上の理由や必要性に関係なく慣用化され、初期の小グループ内での使用から、やがては一定の地域的広がりを持つ言語共

(4) BOILEAU(1942), pp.147-150. ここで Boileau が提示している概念 “phénomène psychique de l'intellection” は、外来の語彙の意味を解釈し、現実の事物に適用させようとする、借用側の言語話者の認知過程であると考えられる。

同体全体に浸透していだろう。ここにおいて外来の言語要素は、当該言語の言語目録に加えられる、即ち「言語化」されるのである。

この過程は、具体的な行為を表す動詞に関しては、一般に言語記号に身振りが伴う為に、比較的単純である。対象となる事物を指示する実詞と同様に、記号内容が新しい観念を指示する場合、聴覚的印象はより感知されやすい。心理的観点から言えば、このカテゴリーに属する動詞は確かに数も多く、しかも様々な派生形を生み出す源になる場合が多いが、深層にまで至る他言語の影響に関する証拠として考えることはできないのではないか。具体的な行為を表す他の多くの語と同様に、具体的な意味を表す動詞の借用には、意味理解の上で多くの努力を必要としないからである。この借用過程は、Boileau に従えば、「直接的認知過程 (*intellection immédiate*)」と呼ばれるべきものである⁽⁵⁾。

これらと比較して、主語（或は主体）が獲得した或は獲得しつつある性質を、主語に付与する為に用いられる自動詞を借用する場合には、理解の面でより大きな努力が強いられる。主語と述語との関係、即ち認知過程における主観的要素を捉えることは、このカテゴリーに属する動詞については極めて困難である。事実、形容詞と同様に、これらの動詞の借用例は極く限られている⁽⁶⁾。

借用が最も困難な動詞のカテゴリーは、主体の受ける感情を表現する動詞のそれである（例えば “*aimer*”, “*haïr*”, “*souffrir*” 等）。こうした動詞が借用される場合には、それらの持つ情動的ニュアンスを伝達できる二言語話者の存在が必要になると考えるのが自然であろう。しかし自身の感情を表出する以前にそれを外在化する話者の態度によって理解が容易になる場合が考えられる。例えば “*Je vous hais.*” という文が発話される際に、話者が一切の心的態度を何らかの動作、表情、身振り等によって表明しないなどということは考えられない。従って、このカテゴリーに属する動詞の借用が、基本的に二言語話者の存在を前提するとは言い切れないだろう。ただし二言語話者の存在がこれらの

(5) id.

(6) GESCHIERE(1950) 及び LEGROS, *op. cit.* 参照。

動詞の借用を容易にしていることは事実である。Warland⁽⁷⁾ が示した例がこれに当たる。ガロロマン語からフランス語の *haïr* に、ワロン語の *hére*⁽⁸⁾ になったフランク語の **hatjan* の場合、借用に介在したのはフランク人の二言語話者であり、ガロロマン語を使用しつつ、頭に浮かんだ母語の動詞をラテン語化したものと考えられるこの場合、ラテン語の *odisse* を用いなかったのは、Warland が指摘するように「憎む」という精神的・心理的意識を言語化する上で、母語の語彙がフランク人の二言語話者にとってより妥当なものと感じられたからであろう⁽⁹⁾。

借用を与える側であれ、受ける側であれ、二言語話者の存在が必ずしも借用の基礎にはならないとするならば、Boileau の言う「間接的認知過程 (*intellection médiate*)」という概念を認めることができるだろう⁽¹⁰⁾。その場合、借用する側の言語話者が起点言語の語の意味をどのように捉えたのかということを明示する為に、起点言語においても、借用を受ける言語 (受容言語) においても、当該語彙の意味内容を完全に考慮に入れておかなければならない。

3. 意味の「ずれ」

二言語話者を媒介としない動詞の借用を考える場合、借用によって生じる意味の変化を規制するふたつの基本的な傾向に注目する必要がある。

第一の傾向は、借用された動詞に認められる「本質的観念の不安定性」ということである⁽¹¹⁾。起点言語における動詞の意味に関わりなく、借用者はその動詞が起点言語において意味する概念の一面をのみ捉えるのであり、ある特殊な意味内容を自発的に、主観的に、起点言語において持つ意味とは独立的に限定

(7) WARLAND(1940), p. 216.

(8) id. *hére* は直説法現在一人称単数形から類推された不定詞形。

(9) id.

(10) BOILEAU, op. cit.

(11) id.

・適用してしまうのである。

最初に、この傾向を具体的な行為を示す動詞について見ていく。なお、抽象的な意味を表す動詞については後述する。

w. lg. (wallon liégeois) の動詞 *rider* (fr. *glisser*) に関して、Verdeyen⁽¹²⁾ は以下のように指摘している。*rider* は中世オランダ語の語源形 *rīden* (現代オランダ語では *rijden* : “aller à cheval”, “se faire transporter en véhicule”) からの借用であるが、*rīden* の一義的意味は古高地ドイツ語 *rītan* に見られる “se déplacer dans une direction donnée” であり、“glisser” を意味する場合は補語 “opt ijs (「氷上で」)” を伴う表現に限られている。Verdeyen の結論に従えば、「借用は意味的には極めて限られたものでしかなく、むしろ局地的現象である」ということになる。これに対して、Herbillon⁽¹³⁾ は、Godefroy が引用したヴォージュ方言 (vosgien) の、“glisser de flanc sur un chemin en parlant d’une voiture” の意味で用いられる *rider* の例を挙げて反駁を試みている。意味論的に、Verdeyen の結論は正当であるとは考えられない。借用する側の言語話者が “opt ijs *rīden*” (「氷の上で滑べる」) という表現を通して認知した概念は、本来の表現が持つ概念に比較して、より漠然とした不正確なものである。何故なら、*rider* に “glisser” という絶対的意味を付与したのは借用者の側であるからだ。即ち、借用者は自身の認識に従って新しい動詞 *rider* を用いたことになる。

従って、借用過程の分析はこうしたより一般的な面から始める必要がある。それは即ち、外来の記号表現 (signifiant) と借用語の間の微妙に「ずれ」た関係であり、借用を通してのみ理由付けられる意味の「ずれ」を示すものである。その意味で、先に述べた「本質的観念」(或は「基底的意义素」) は、借用する側の言語の意味的要請に従って、程度の多少はあれ、本来不安定なもので

(12) VERDEYEN(1932), pp. 238-239.

(13) HERBILLON(1952), p. 132. Godefroy については, GODEFROY, F. (1961) : “Dictionnaire de l’ancienne langue française” (10 vols.), New York. 参照。

あると言える。

この「意味のずれ」という現象が現われる例として、技術用語が借用される場合が挙げられる。例えば、炭坑技術用語の *w. lg. bakener* はオランダ語の河川輸送技術用語 *bakenen* を借用したものであるが、*bakenen* が “*placer des bouées*” を意味するのに対して、*bakener* の意味は “*ouvrir et creuser une ‘bacnure’*” である⁽¹⁴⁾。又、*w. lg.* の古語形 *heûler* は武器製造技術用語で、フラマン語の木靴製造技術用語 *heulen* からの借用であるが、*heulen* が “*creuser*” を意味するのに対して、*heûler* は “*emmboutir*” を意味する⁽¹⁵⁾。

上の二例の場合、借用される側の言語の基底となる意義素或は本質的観念（第一の例では “*jalonner*”，第二の例では “*creuser*”）が、行為それ自体の概念と混同されている。これらの例から、技術用語が借用される場合、ある分野の技術用語が別の分野の技術用語として取り入れられることによって、意味が比喩化されて用いられることが分かる。

中世オランダ語 *luchten* (“*alléger*”)⁽¹⁶⁾ からの借用語である *w. lg. lûter* 或は *lûteler* は “*vider*” を意味し、*li p’tit a lûté s’botèye d’on côp* (“*le petit a vidé son biberon d’un trait*”), *lûter on batê* (“*décharger un bateau*”), *li fosse èst lûtèye* (“*la houillère est épuisée*”)⁽¹⁷⁾ 等の文脈で用いられる。これは、起点言語の動詞の本質的観念が受容言語においてさらに具体化され拡張された例である。

借用によって、受容言語において自発的、自立的な意味の転用が引き起こされるという現象が比較的頻繁に起こり得るとしても、具体的な行為を意味する

(14) BOILEAU, op. cit. 参照。Boileau に従えば、*bakener* はオランダ語の動詞 *bakenen* からの直接的な借用と考えられる。実詞 *bâkène* (“*bouée*”) からの派生形だとすれば、**bâkener* が予測されるからである。なお、*bacnure* は「炭坑内の坑道」の意味である。

(15) HAUST, op. cit., p. 488.

(16) *ibid.*, p. 377.

(17) *id.*

動詞の大部分は、起点言語の動詞の意味を忠実に保っている場合がほとんどである。それは、認知過程が *signifiant* と *signifié* の直接的関係に限定されるからである。具体的な行為を意味する動詞が借用され、その意味が受容言語においてより容易に理解されるのは、直説法現在形或は命令法で用いられる場合であることから、上に述べたことは認められるだろう。

4. 意味の「ゆらぎ」

動詞の借用における意味の転移に現われる第二の傾向は、受容言語の話者が、借用された語に軽蔑的な、滑稽な、或は隠語的な意味を付与することである。

起点言語にこうした意味の変化を促す素因が全く見られないにも拘わらず、この種の変化が実際に起こり得る。しかしこの変化の要因は、Bréal が指摘しているように、「表層的なゆらぎ (*fluctuations du dehors*)」によるものではない⁽¹⁸⁾。Bréal は「語に内在する、いわゆる妄想や空想を喚起する性格 (*prétendues tendances chimériques et imaginaires des mots*)」について言及しているが、これは借用語における意味の変化の外在的要因と考えられるべきものであろう⁽¹⁹⁾。Bréal の概念を民間借用の例に適用してみると、借用の状況それ自体に、こうした外在的要因を求めることができる。

例えば、A 言語共同体内で、B 言語共同体の成員が自分自身の言葉を語る場合、A 言語共同体の成員に、何かしら現由の判然としない笑いや苛立ちを誘うことがある。A 言語共同体の成員にとって理解が不可能だからであることは言うまでもない。これは極めて人間的な反応であろう。ワロン人がフラマン人及びフラマン語 (cf. w. lg. flam'tedje (“baragouin flamand”)) に対して浴びせかける皮肉や嘲弄には、痛烈で情け容赦のないものが多い。一般的に言えば、ワ

(18) BREAL(1924), p. 106.

(19) id.

ロニー地域に移住ないしは移動してきたフラマン人の話すフランス語は、ワロン人の嘲笑の対象になりやすい。さらにこれらのフラマン人がフラマン語を話す場合、或はフラマン語の語彙をフランス語の文に混ぜて使う場合、フラマン語の意味をほとんど理解できないワロン人は、往々にしてそれらの語を軽蔑的で嘲弄的な意味に取り、自らの言語内に取りこむことが多い。しかも、これらのフラマン語がワロン語に取り入れられた場合、しばしば全く予期できない音声上の *déformation* を被る。民間語源が介在するのはこのような状況であろう。

上に述べた現象は 次のような 事実に基づいて 解釈されるものであろう。即ち、受容言語側の話者が、聞き取った語から不完全な聴覚的印象しか受けない場合、自分自身の言語にある、音声的に類似した語に本能的に関連付けてしまうことがある。言語の交差或は混交が生じるのはこのような場合だろう。例えば、w. lg. の *buskinter* (“fêter qn.”) : fl. (flamand) *besteken* (“id.”) + w. lg. *buskèt* (“bouquet”)⁽²⁰⁾, *trèfiler* (“trépigner de joie impatiente”) : fl. *drevelen* (“marcher à petits pas rapides”) + w. lg. *filer* (“rouet”)⁽²¹⁾, *forzâder* (“renoncer, ne pas fournir d’une couleur”) : nld. (néerlandais) *verzaken* (“id.”) + w. lg. *hazârdér* (“hasarder, gaspiller”)⁽²²⁾ 等が挙げられる。このように、借用語を音声的に類似した受容言語の語彙に関連付けることによって、ふたつの語の間に自発的で偶然的な意味関係が生み出される。しかも、借用が行われた時点で、受容言語の語の意味が起点言語の語の意味を言わば「特殊化」していることに注目する必要がある。

もっとも、軽蔑的、嘲弄的意味を持つこれらの動詞の多くは、ワロン語の意味体系内から排除され、消失する傾向にある。例えば、“*gaspiller*” 或は “*négliger*” の意味に関連した動詞、*furlanguer* (“désirer” を意味するオランダ語

(20) HAUST, op. cit., p. 122.

(21) HAUST(1923), p. 256.

(22) HAUST(1979), p. 276.

verlangen から借用され、そこから “y dépenser son argent” さらに “gaspiller” に意味が転用されている)⁽²³⁾, forboûrner (“gaspiller”) (nld. verboeren (“perdre son argent à force de mal conduire son travail et ses affaires”) からの借用)⁽²⁴⁾, forlozer (“gaspiller”) (nld. verwaarlozen (“négliger”) からの借用)⁽²⁵⁾ 等が挙げられる。

これらの動詞の意味は、起点言語の動詞が持っていた本来の意味を理解し得なかった借用側の話者が、借用の時点で、全く新しく創り出した概念である。この「隠語タイプ」とでも呼ぶべき借用の多くは、その用法が時間的にも空間的にも極めて限定されている。しかし、その中の幾つかは受容言語に完全に転移され、言語目録の中に定着しているものもある。w. lg. ではすでに例として挙げた rider がこれに当たる。他の例としては、古オランダ語 *scīten からの hiter (“foirer”)⁽²⁶⁾, m. nl. (moyen néerlandais) slippen からの hiper (“échapper, glisser”)⁽²⁷⁾, フランク語 *bisōn (cf. all. (allemand) biesen (“mutwillig springen, wie toll rennen”)) からの bizer (“courir, se sauver, faire une fugue”)⁽²⁸⁾ 等がある。これらの動詞はおそらく先に述べた隠語的な段階を経て定着していったものと思われる。これらが隠語的段階を経て、ワロン語の語彙項目の中に正当な位置を獲得しているという事実は、近代以前の借用の様態を考える上で、音韻変化等と同様に、重要な基準として取り上げられるべきものであろう。

最近の借用例の中にも、w. lg. に完全に定着している動詞がある。例えば、前記の buskinter や trêfler, fl. dabberren (“barbouiller”) からの dâborer (“id.”)⁽²⁹⁾, nld. draven (“trotter, courir”) からの trafter (“trotter bruyam-

(23) GESCHIERE, op. cit., p. 121.

(24) id.

(25) id.

(26) ibid., p. 150.

(27) BOILEAU(1946) 参照。

(28) WARLAND, op. cit., p. 67.

(29) HAUST, op. cit., p. 193.

ment, courir vite”)³⁰⁾, fl. spetten (“jaillir, cracher, éclabousser”) からの spiter (“éclabousser”)³¹⁾, fl. tuten (“sucrer en avançant les lèvres, à la façon d’un nourrisson”) からの tûter, tûteler (“boire au goulot, lamper”)³²⁾, fl. roefelen, roffelen (“rosser”) からの roufler (“se ruer, bousculer”)³³⁾, nld. broddelen (“bousiller, gâcher un ouvrage”) からの brôd(y)î (“id.”)³⁴⁾ 等が挙げられる。

ところで、二言語話者を仲介としない、抽象的な意味を表す動詞の借用過程は意味論的にどのように説明されるだろうか。本論では Boileau³⁵⁾ に従って、w. lg. の djêri (“convoiter, désirer ardemment”)³⁶⁾ と tûzer (“réfléchir, songer, méditer”)³⁷⁾ を取り上げてみる。

djêri の借用過程に関して、Haust は、“désirer”を意味する中世高地ドイツ語の gern やフラマン語の geren、或は古低地フランク語の *gērōn ではなく、“fermenter”を意味するドイツ語の gären やオランダ語の gijlen に起源を求めるべきだとしている³⁸⁾。Haust によれば、djêri が喚起する観念は「無軌道で異常な本能的欲望」であり、事実、この語の本来の意味は「妊婦の本能的欲望」だからである³⁹⁾。従って、この動詞は「抽象的ではなく具体的な意味を表す語のカテゴリーに入れるべきものである」⁴⁰⁾ということになる。Corin や Warland も、i djêrêye so tot (“il a envie de tout ce qu’il voit”) 等の表現に示されているように、一般的意味は、借用語の意味領域の拡張に過ぎず⁴¹⁾、ラテ

30) ibid., p. 670.

31) ibid., p. 610.

32) GESCHIERE, op. cit., p. 281.

33) ibid., p. 38.

34) ibid., p. 123.

35) BOILEAU(1942) 参照。

36) HAUST, op. cit., p. 225.

37) ibid., p. 682.

38) id.

39) id.

40) BOILEAU, op. cit. 参照。

41) CORIN(1934), p. 57.

ン語の *bullire* の派生形 **bullicare* (“*bouillir*”) がフランス語の *bouger* に変化した過程と比較し得るとしている⁴²⁾。これに対して、Boileau は、借用語の意味変化と土着語 (*mot autochtone*) の意味変化の同一レベルでの比較は、借用がなされた後の一次的意味を起点にして初めて可能になるとして、上記の判断を否定している⁴³⁾。実際に、*djêri* に “*fermenter*” の意味がかつて存在していたことを確証できる資料はないが、Boileau の言うように、抽象的意味を持つ古低地フランク語 **gērōn* が借用する側の話者に完全に理解されず、主体（話者）の態度を表す動詞であると感知され、しかも借用によって、その意味が幾分かは具体化されたと考えるならば、解釈は容易になる⁴⁴⁾。その典型的な例は、先に述べた「直接的認知」による借用のプロセスであろう。

tûzer に関しては、外見的には抽象的な意味価値しか持っていない為に、*djêri* と比較すれば、問題はそれほど複雑ではない。*tûzer* が借用されたオランダ語の Limbourg 方言の *tûze* の意味は (“*être immobile en train de réfléchir*”) で、態度を示す動詞である⁴⁵⁾。

5. 結 論

ワロン語におけるゲルマン語の動詞の借用は、量的にはどうあれ、内容的にはかなり限定された言語現象であるということが言えるだろう。さらに、この借用過程には二言語話者の介在が大きな役割を果たしているという仮説が成立するとは考えにくい。

ガロ＝ロマン期以後のワロン語におけるゲルマン語からの借用は、一般に本論で述べた過程に基づいていると考えても間違いはないだろう。古い時代の借用は意味的に安定してはいるが、時間的要因だけでこの現象を説明できるとは

⁴²⁾ WARLAND, op. cit., p.91.

⁴³⁾ BOILEAU, op. cit. 参照。

⁴⁴⁾ id.

⁴⁵⁾ WARLAND, op. cit., p. 185.

かぎらない。借用という現象を分析する上で、現在の地域言語や方言を資料として利用するのは当然であるが、それだけでは exhaustive な分析は不可能である。現在では抽象的な意味を持つ動詞が、具体的な意味要素をも内包している場合があることは、上に示した通りであるが、その起源となる語がすでに抽象の意味を持っているのであれば、借用はまずそこから始められたと考えざるを得ない。

参考文献

- BAL, W. (éd) (1981) : “Dialectologie en Wallonie”, Louvain-la-Neuve.
- BOILEAU, A. (1942) : ‘Les emprunts’ in “Revue des Langues Vivantes VIII”, pp. 90-99 et pp. 144-150.
- id. (1946) : ‘Le problème du bilinguisme et la théorie des substrats’ in “Revue des Langues Vivantes XII”, pp. 113-125, pp. 169-193 et pp. 213-224.
- BREAL, M. (1924) : “Essai de sémantique”, Paris.
- CORIN, A. L. (1934) : ‘Nouveau propos d’un braconnier. Le Dictionnaire liégeois et les germanistes’ in “Bulletin du Dictionnaire wallon 19”, pp. 1-144.
- DEROY, L. (1980) : “L’emprunt linguistique”, Paris.
- GESCHIERE, L. (1950) : “Eléments néerlandais du wallon liégeois”, Amsterdam.
- HAUST, J. (1923) : “Etymologies wallonnes et françaises”, Liège.
- id. (1936) : ‘Eléments germaniques du Dictionnaire ligégeois’ in “Bulletin de la Commission royale de Toponymie et Dialectologie 10”, pp. 431-470.
- id. (1979) : “Dictionnaire liégeois”, Liège.
- HERBILLON, J. (1952) : ‘Eléments néerlandais du wallon liégeois’ in “Les Dialectes belgo-romans 9”, pp. 32-53 et pp. 124-144.
- LEGROS, E. (1942) : ‘Le Nord de la Gaule romane’ in “Bulletin de la Commission royale de Toponymie et Dialectologie 16”, pp. 161-228.
- MACKEY, W. F. (1976) : “Bilinguisme et contact des langues”, Paris.
- VALKHOFF, M. (1931) : “Etude sur les mots français d’origine néerlandaise”, Amersfoort.
- VERDEYEN, R. (1932) : ‘Comment reconnaître les éléments flamands dans les dialectes wallons?’ in “Fédération archéologique et historique de Belgique, XXIXe session, Congrès de Liège”, pp. 237-314.

- WARLAND, J. (1940) : “Glossar und Grammatik der germanischen Lehnwörter in der wallonischen Mundart Malmédys”, Liège.

(ルーヴェン・カトリック大学 (Katholieke Universiteit Leuven)
文学・哲学部東洋学科日本学専攻課程専任講師)